

ワークショップ

「社会科学の哲学・工学の哲学の将来」

オーガナイザー 出口弘（東京工業大学）

伊勢田哲治（京都大学）

物理学の哲学、生物学の哲学といった分野と比べ、社会科学の哲学や工学の哲学は、すくなくとも科学基礎論学会の周辺（すなわち日本の科学哲学、科学基礎論の研究者の間）ではこれまであまり研究がなされてこなかった印象がある。これは、これらの領域について語るべきことがなかったということではないはずであり、実際海外に目を転ずるならそれぞれの領域において活発な議論が行われている。本ワークショップは、科学基礎論学会の60周年という節目にあたって、あらためてこれらの領域の本学会周辺での研究の現状を振り返り、これらの領域の今後についてどういうことが予想されるのか、どういうことをするべきなのかを考える。

社会科学の哲学と工学の哲学には、内容的な面でも接点はいくつか存在する。たとえば、それぞれの分野の研究対象である社会や工学に人間が関わるということ、対象の複雑さにまつわる問題をかかえること、システム概念の有用性などが挙げられるであろう。ただ、今回の企画は社会科学の哲学と工学の哲学の内容的な接点を探るというよりは二つの分野の置かれている境遇の類似性に着目した形で設定されている。そのため、もう少し外在的な視点で、たとえばそれぞれの分野における哲学者と社会学者/工学者との関わりかた（これまでの関わり方、今後のあるべき方向）を考える、といった方向で話題に統一性を持たせることを考えている。